

キャンプ・ルンビニ



七月二十六日(日)から八月一日(土)まで、ワサガビーチにあるお寺のコテージで、毎年恒例の「キャンプ・ルンビニ」が開催されました。今年は新たに九名のキャンパーが加わり、合計十四名が参加しました。また、八名のカウンセラーが一週間を通してさまざまな活動をリードしてくれました。

今年も橋本先生、杉浦先生、宇佐美先生、そしてリサさんがキャンプを訪れ、「仏教入門」の時間を担当してくださいました。今年のテーマは「おかげさま」です。

先生方のお話の後、「三猿」をテーマにした参加型のアクティビティを行い、私たちが日頃、周りの人をどのように見て、聞き、語っているのかについて考えました。また、自分たちが普段気づかないところで、多くの人に支えられていることにも目を向け、「おかげさま」の意味を楽しく学ぶ機会となりました。

今年も「Hiroshima Nagasaki Coalition Day」の皆さまと協力し、キャンパーとカウンセラーで平和を願う灯籠や折り鶴を作りました。それらは後日、ネイサン・フィリップス・スクエアで行われた行事にて展示されました。

また、キャンプ・ルンビニでは一年を通し

て、お寺のさまざまな行事で募金活動を行っています。集められた資金は、ルンビニのキャンビンの維持管理や、将来の洗面所改修などに活用される予定です。

今年のテーマであった「おかげさま」は、キャンプ・ルンビニそのものにも、とてもよく当てはまる言葉でした。キャンプは、保護者ボランティア、調理担当、カウンセラー、コオーディネーター、先生方、そして一年を通して支えてくださる多くの皆さまによって成り立っています。調理や運営を支えてくださったジョアン・Kさん、ジョアン・Mさん、グレースさん、ケリーさん、マサノリ・Mさん、テッドさん、ヨシさん、ミシェルさん、そしてコオーディネーターのレイチェルさん、コウジさん、ステイブンさんに心より感謝いたします。

また、カウンセラーとして一週間キャンパーを支えてくださったホアキンさん、ショウヘイさん、マイさん、ミカさん、キヨさん、ミズキさん、アレックスさん、ライアン・Mさん、ありがとうございます。今年のご協力ありがとうございました。今年のTシャツをデザインしてくれたミズキさんと、シルクスクリーン印刷を担当してくれたレイチェルさんにも、特別な感謝を申し上げます。こうして、今年も無事にキャンプ・ルンビニを終えることができました。来年の「キャンプ・ルンビニ 二〇二七」で、また皆さんにお会いできることを楽しみにしています。

合掌

アバゲイル・カタオカ

バザーのお知らせ

今年も毎年恒例のお寺のバザーが開催されます。どうぞ予定を開けておいてください。

日時：十一月 十四日(土)

正午から午後四時まで

みんなで楽しい時間を過ごしましょう！

ボランティアの皆様へ

寺院内外に問わず、トロント本願寺の護持発展に対して、ご尽力くださるすべての方々に感謝を申し上げます。

合掌



モミジでの定例法要

(第2木曜日 10時半～)

※昨年より午前中に変更



私たちは、今日の前にあるさまざまな困難を乗り越えていくことができます。

そして願わくば、政府の取り組みや、世界の人々が共に社会のあり方を変えていくことによって、より持続可能で、人にも地球にもやさしい世界へと向かっていくことができるでしょう。私たちは、これまでの無駄の多い暮らし方を見直さなければなりません。

かつて先住民の人々が自然と共に暮らしてきたように、私たちも持続可能な生き方を学んでいく必要があります。私たちは変わらなければなりません。

合掌

ミニスターアシスタント

デニス・マドコロ（橋本訳）

（本記事ではデニスさん独自の見解が含まれております）

枕経のお知らせ

ご家族の枕経を検討されている場合は、当寺院の事務所へご連絡いただくようお願いしております。ご希望の時間を調整し、一緒に臨終の仏徳讃嘆のお勤め、もしくは、故人を偲びながら、ご家族の皆さんとお勤めをさせていただきます。当寺院に事前にご連絡いただくことによって、ご家族の質問への対応や必要な情報を提供することが可能となります。

トロント本願寺 理事会

祥月法要のお知らせ

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの仏徳を讃嘆し、報謝の思いでお勤めする法要です。

日時…九月 十三日（日）

十月 四日（日）

（日本語…午前十時四十五分から）

（英語…午前十一時から）

どうぞ祥月でない方も皆様ご参拝下さい。



ラリースانデー

毎年、レイバーデーの後の日曜日はお寺では、ラリースانデーとしてお寺の様々な取り組みを紹介するパネルなどが地下ホールに設置されにぎやかな一日となります。

今年は橋本と杉浦先生、そして現在お寺を手伝ってくれている宇佐美さんが修了した龍谷大学大学院の学生と教授の方々がカナダ東地区研修でトロントを訪問されます。

研修の一環でラリースانデー並びに九月の祥月法要に参拝される予定となっております。ぜひ皆様で日本からの学生をお迎えしましょう！

秋のお彼岸法要のお知らせ

日時…九月 二十日（日）

「彼岸」とは「向こう岸」という意味であり、迷いの世界である此岸から、さとりの世界へと至ることを表す言葉として用いられてきました。日々の生活の中で、私たちは忙しさや思いにとらわれ、自分中心の見方に閉じこもりがちです。お彼岸のご縁は、そのような自身のあり方を見つめ直し、今この身がどのようなはたらきによって支えられているのかに気づかされる大切な機会となります。

お彼岸は、私たちにとって、あらためて仏法に耳を傾ける大切なご縁です。このご縁を通して、ありのままの私をそのまま受けとめ、はたらき続けてくださっている阿弥陀さまの願いに、静かに心を向けてみたいと思います。



グレタさん、ごめんなさい



おはようございます。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

今回の記事のタイトルは、

気候変動問題について活動しているグレタ・トゥーンベリさんへの謝罪です。彼女は十代の頃、世界の指導者たちに向かって「よくもそんなことを！」と強く訴え、私たちに大きな問いを投げかけました。

近年、森林火災による煙や、ますます厳しくなる暑さのため、普通に生活するどころか、息をすることさえつらく感じる日があります。

そして、その煙と暑さに包まれた世界に暮らしているのが、私たち自身です。特に仏教徒として考えるならば、あらゆるものはつながり合っている、さまざまな原因と条件によって成り立っていることに気づかされます。

私たちは皆、これまで「普通の生活」を送ろうとしてきました。しかし、その生活そのものが、現在の状況を生み出す一因となってきたのではないのでしょうか。

ガソリン車であっても電気自動車であっても、私たちは車を使います。電気自動車であっても、その電気をどこかで生み出さなければなりません。私たちは電気製品や電子機器に大きく依存し、そのために膨大なエネルギーを消費しています。

例えば、私たちが日々便利に利用しているインターネット検索。その膨大な情報を支えているデータセンターでは、大量の電力が消費されています。また、巨大なコンピュータを冷却するためには、多くの水も必要になります。

こうしたエネルギー消費の積み重ねが大気をさらに暖め、森林を乾燥させ、森林火災が起りやすい環境につながっていきます。

もし私たちがこのまま同じ道を歩み続ければ、この小さな青い惑星、私たちが「地球」と呼んでいる場所は、人間にとつてますます暮らしにくい場所になってしまおうでしょう。

では、私たちの孫たちはどうでしょうか。私たちは、どのような世界を彼らに残そうとしているのでしょうか。

今のような状況に直面すると、私たちは途方に暮れてしまいます。しかし、浄土真宗の宗祖である親鸞聖人が生きた時代の人々もまた、大きな困難の中を生きていました。

彼らが直面したのは森林火災や猛暑だけではなく、地震、洪水、飢饉、そして疫病など、さまざまな災害や苦難が人々を襲いました。当時の日本では、多くの人々が文字を読むことができませんでした。そのような人々は、困難の中で生き続ける支えを、どのようにして見いだしたのでしょうか。

人々は、親鸞聖人やその門弟たちから口伝えに伝えられた念仏に希望を見いだしました。

当時の浄土真宗の人々を支えたものは、今を生きる私たちにも受け継がれています。

そして同時に、私たちが社会全体として力を合わせれば、気候変動を引き起こしている原因を少しでも減らし、未来の家族や子どもたちが、豊かで楽しく暮らすことのできる世界を残していく希望もあるのではないのでしょうか。

皆さんは、カナダの先住民の人々が、かつて集落の周辺で計画的に火を入れていたことをご存じでしょうか。

その火入れによって、人々の暮らす場所を大規模な火災から守ることができました。それだけではありません。火が消えた後の土地には、不思議なことにハックルベリーやラズベリー、イチゴなどが豊かに育ったといいます。大地は再びよみがえったのです。

何という知恵でしょう。そして、何という素晴らしい遺産でしょうか。この知恵は、先住民の口承文化を通して、世代から世代へと伝えられました。

どこか私たちにも馴染みのある話ではないでしょうか。

同じように、念仏の智慧もまた、豊かに実るハックルベリーやラズベリー、イチゴのように、世代から世代へと私たち浄土真宗の門徒へ受け継がれてきました。

【次頁に続く】

また会える



こんにちは。いかがお過ごしでしょうか。

あつという間に七月が過ぎ、八月も終盤に差し掛かうとしています。やはりカナダは日本に比べて、暑さがだいぶましだと感じています。日本では四十度近い気温となる日もあり、蒸し暑い日が続いているそうです。

八月という時期は、僧侶にとって繁忙期でもあります。私の実家のお寺では、毎年八月から「お盆参り」を行います。

「お盆参り」とは、メンバーさんの家を訪ね、ご家族と一緒にお経を読むのです。毎年だいたい五十軒ほどのお家を回ります。それと同時に、お墓参りも行います。こちらも五十基から七十基ほどのお墓を、一基一基回りながらお経を読ませていただきます。

もちろんお墓は外にありますので、炎天下の中でお経を唱えることになります。一日の終わりに、自分がお経を読んでいるのか、それともただ生き残ろうとしているのか、分からなくなるほどです。全国の僧侶たちも、この時期はまさに死に物狂いでお盆参りに励んでいることでしょう。それでも、お盆参りを続けるのには理由があります。

多くの方にとって、お盆は亡くなった方を思い浮かべる時期です。日本では、家族が集まり、一緒にお墓へ参るという文化があります。

ここトロントでも同じように、お墓参りをし、故人を思い出します。家族と過ごした時間や、さまざまな思い出を振り返る機会でもあります。

僧侶はその尊い時間をご家族と共に過ごし、お経を読み、手を合わせます。そうする中で、故人とのご縁をあらためて感じ、また、そのご縁を通して阿弥陀さまとのご縁にも出遇わせていただく。そうした時間をご家族と共に過ごさせていただいています。

今年七月に行いました、トロント仏教会主催の盆祭り。その盆踊りでは、「涙そうそう」という曲も踊りました。この曲は、お盆という時期にとってもよく合う歌だと感じています。

「涙そうそう」という言葉は沖縄の方言で、「涙がぼろぼろとこぼれる」という意味を持ちます。歌の前半では、アルバムの写真を見ながら大切な人を思い出す情景が描かれ、すでに会うことのできない人への想いが表されています。そして後半では、会いたくても会えないという切ない気持ちがより強く描かれています。

しかし、そこにあるのは単なる悲しみだけではありません。今も自分を見守ってくれている存在として大切な人を感じ、その人への感謝も込められています。

曲全体を通して描かれているのは、大切な人への変わることのない想いです。特に私の心に残っているのは、二番の最後に歌われる、大切な人を思いながら、いつの日か再び会えることを

を信じて生きていくという部分です。

大切な人に会えない中で、悲しみや寂しさを抱えながらも、その人との思い出を胸に、前を向いて生きていく。そして、また会える信じながら生きていく。そのようなメッセージが込められているように感じます。この思いは、浄土真宗の教えにも通じるものがあります。

阿弥陀さまの浄土に生まれた者は、仏となります。そして、やがて私たちもお浄土に生まれさせていただき、そこで大切な人と再び出会うことができると思います。故人を思い出すことは、単に過去の思い出を振り返るだけではありません。「また会える世界がある」と聞かせていただきながら、私たちは今日という日を生きています。

お墓参りを終え、盆踊りも終わり、私たちはまたそれぞれの日常へ戻っていきます。けれども、亡き人とのご縁まで終わるわけではありません。

ふと写真を見たとき、懐かしい歌を聴いたとき、昔の言葉を思い出したとき、その人と過ごした時間が私の中によみがえります。それもまた、お盆という時間が私たちに与えてくれる、大切な意味の一つなのかもしれません。

南無阿弥陀仏

アシスタントミニスター 杉浦輝

たまにブルージェイズの試合を観に行ったり、友人と食事をしたりする時にダウンタウンへ向かう場合は、地図アプリが欠かせません。慣れていない場所を歩いていると、

「本当にこの道で合っているのかな」

と、何度もアプリを確認してしまいます。目的地は分かっているけど、そこへ向かう途中では迷ったり、不安になったりするものです。

私たちの人生も、どこかそれに似ています。

明日何が起るのかも分かりませんし、自分の選択が正しいのか確信を持ってないこともあります。では、「正定聚に定まる」とはどういうことでしょうか。

それは、私たちの心が迷わなくなるということではなく、迷い続けるこの私の行き先が、阿弥陀仏の本願によつてすでに定められているということです。

これは、私たちが立派な人間になったからではありません。深い智慧を身につけたからでも、特別な修行を完成したからでもありません。むしろ阿弥陀さまの本願は、貪りや怒り、愚かさを抱え、思い通りにならない人生の中で迷い続ける私たちのために建てられた願いです。

そして、その本願が成就して私たちに届いているのが、南無阿弥陀仏というお名号です。南無阿弥陀仏は、私たちが自分の力で浄土へ行くために積み上げるものではありません。それは

阿弥陀さまの側から、「そのままのあなたを決して見捨てない」とはたらきかけてくださる、慈悲のよび声です。

その本願のよび声を聞き、信心をいただいたとしても、私たちは相変わらず悩みます。怒ることもあります。不安になることもあります。自分中心の考えにとらわれることもあります。

しかし、そこに一つ大きな違いがあります。

私たちの心は定まらなくても、阿弥陀さまのはたらきは決して揺らがない。

私たちの往生が、自分の心の状態によつて決まるのではないからです。今日は安心していても、明日は不安になる。それが私たちです。もし私たち自身の確かさによつて往生が決まるのであれば、いつまでたつても本当の安心を得ることはできないでしょう。

そうではなく、阿弥陀さまの本願がすでに成就され、そのはたらきが南無阿弥陀仏となつて私たちに届いている。だからこそ、私たちは今ここで正定聚の位に定められるのです。

正定聚とは、未来のすべてが分かるという安心ではありません。何が起るか分からない人生を生きるこの私が、それでも決して見捨てられることなく、すでに仏となる道の中にあるという安心です。

ただし、ここで大切なのは、正定聚に定まることと、今この人生で仏さまになることは同じではないということです。信心をいただいたか

らといって、私たちの煩惱がなくなるわけではありません。急に何事にも動じない人になるわけでも、怒りや欲、愚かさから離れた存在になるわけでもありません。私たちはこの命を終えるまで、迷いを抱えた凡夫として生きていきます。

私たちは最後まで凡夫であることに変わりはありません。しかし、そんな私を見捨てず、必ず仏にすると願い、はたらき続けてくださる阿弥陀さまの本願があります。

変わるのには、私たちが迷いのない人間になることではありません。迷いの中にあるこの私が、何によつて支えられ、どこへ向かっているのかが明らかになるのです。

先の見えない人生の中で、私たちの心はこれからも揺れ続けるでしょう。それでも、私たちが包む阿弥陀仏のはたらきは揺らぐことがありません。

前回味わった阿弥陀さまの光は、今月、南無阿弥陀仏という名号となつて私たちに届いています。そのよび声を聞きながら、迷い多き凡夫のこの身のままで、すでに仏となる道に定められていることを、九月からともに喜ばせていただきたいと思います。

合掌

駐在開教使 橋本顕正

佛心

今月の正信偈 正定聚の安心



本願名号正定業 至心信樂願為因
成等覚證大涅槃 必至滅度願成就

【原文】

【現代語訳】

本願成就の名号は衆生が間違いない往生するための行であり、至心信樂の願（第十八願）に誓われている信を往生の正因とする。正定聚の位につき、浄土に往生してさとりを開くことができるのは、必至滅度の願（第十一願）が成就されたことによる。

九月の記事にあたり、トロントも少しずつ秋の気配を感じる季節となりました。これから日ごとに気温も下がり、朝晩を中心に涼しさを感じる日が増えてくると思います。夏のにぎやかな季節から、少しずつ落ち着いた秋へと移り変わっていく時期ですね。

少し前のことになりましたが、七月末のある日、杉浦先生と私は在トロント日本国総領事館よりご招待をいただき、松永総領事の公邸でお食事を一緒にする機会に恵まれました。その席では、これから本格的な高齢化を迎えていく日系カナダ人・日本人コミュニティについて、さまざまな立場からゆつくりと意見を交わすことができ、大変有意義な時間となりました。

二〇二六年九月号

浄土真宗 本願寺派

トロント本願寺

私たちは八十年以上にわたり、日曜礼拝や法要、葬儀、そしてさまざまな行事を通してコミュニティと共に歩んできました。これまで大切に受け継がれてきたものを守り続けることは、もちろんこれからも大切です。しかし同時に、時代やコミュニティの変化に合わせて、これまでとは少し違った方法でも、人々の生活や人生に寄り添い、地域の皆さまと共にコミュニティを支えていくことが必要なのではないかと感じています。

今回の会食は、これからのお寺の役割について、あらためて考える貴重な機会となりました。このことに関連して、二〇三〇年のお寺の八十五周年に向け、新たなプロジェクトを立ち上げられればと考えております。詳細につきましては、今しばらくお知らせをお待ちいただければと思います。

さて、前回の記事では、正信偈のなかでも『大経』に説かれる阿弥陀さまの十二の光に言及する部分についてご紹介しました。これらの光は、私たちを照らし、導き、包み込み、決して見捨てることのない阿弥陀さまの智慧と慈悲のはたらきを表しています。

そして記事の最後に、そのはたらきが、今ここに生きる私たちに「南無阿弥陀仏」という名号となって届いている、と書きました。

私たちは八十年以上にわたり、日曜礼拝や法要、葬儀、そしてさまざまな行事を通してコミュニティと共に歩んできました。これまで大切に受け継がれてきたものを守り続けることは、もちろんこれからも大切です。しかし同時に、時代やコミュニティの変化に合わせて、これまでとは少し違った方法でも、人々の生活や人生に寄り添い、地域の皆さまと共にコミュニティを支えていくことが必要なのではないかと感じています。

今月の『正信偈』では、その名号による救いと、信心をいただいた人が正定聚（しようじょうじゅ）の位に定まることが示されています。

「浄土に往生する」と聞くと、私たちはどうしても死んだ後のことを考えがちです。しかし親鸞聖人は、浄土に往生して仏となることが定まるのは、死の瞬間ではなく、今の人生を生きている時であると示されました。

正定聚とは、簡単にいえば、必ず浄土に往生し、仏となることが定まった仲間という意味です。

ただし、正定聚になったからといって、私たちの人生から迷いや不安がなくなるわけではありません。私たちは日々、家族のこと、健康のこと、仕事のこと、人間関係のこと、そして将来のことを心配します。

「この選択で本当に良かったのだろうか」「これからどうなっていくのだろうか」

一つの心配がなくなっただけで、また別の心配が出てきます。考えてみれば、私たちの心はなかなか「定まる」ということがありません。

私は普段、お寺のあるノースヨークを中心に生活していますので、トロントのダウンタウンへ行く機会はそれほど多くありません。

【次頁に続く】